

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



吳照分教会を南西から望む

呉市中心部から東へ約1km。急勾配の坂道を登り切った
休山の麓に位置する。歴代会長・信者らの苦勞が偲ばれる。

立教179年
10月号

布教推進講習会開催

9・21 祭典後

布教部

布教部(田中隆之部長)は9月21日、井筒梅夫先生(本部長・本部布教部長・声津大教会長)を講師に迎え、大教会月次祭後に「布教推進講習会」を開催。役員・教会長夫妻・布教所長283人、また、よふぼく、信者多数が受講した。

講話趣旨は次の通り。

▼道の将来を担う人材を

今年の1月26日、世界各地から20万人余りの教友がおぢばに帰り、教祖130年祭が厳かにかつ盛大に執行された。年祭を目指して三年千日を仕切つて懸命に勤めたお互い、万感の思いで迎えた教祖130年祭だった。

年祭当日、真柱様は神殿講話で「只今、おつとめを滞りなく勤め終え、ひとつ何か切りがついたような気持ちがある」と仰られたように、教祖の年祭が一つの区切りとして、次の成人の塚である教祖140年祭への新しい道へ踏み出された。

「これからの歩みを思索するときにもまして道の将来を担う人材を育成する必要性を強く感じる」と強調され、続いて「こうして年祭をつとめ終えた今日、改めて足元を見つめ直し、長い目で見て人材を育てる、また増やす活動に腰を据えて取り組まねばならない」と、これからの取り組みを具体的に教示された。

つまり「これからの道を担う人材の育成」よふぼくを増やすことに本腰を入れて取り組もう」と全教に呼びかけた。これからは、これが具体的な方針になると思う。

本部として、その中でも教会長子弟育成に目を向けてまず相談したい。本部として、3月に教会長子弟育成プロジェクト、8月に後継者講習会、この二つを打ち出した。

本部の名簿を見ると、中学1年生から大学4年の13才から22才の教会長子弟の数が、11年間に25パーセント減少、17年間のスパンでは30パーセント減少している。これは教勢でなく少子化の影響で、これからも続くと思われる。教会を力強く支えることが出来る教会長子弟の絶対数が減っている。全教的に早急に取り組まねばならない本

教の課題だ。

教会後継者だけでなく、兄弟の一人ひとり信仰に繋がるように、まずご自身の子・孫の育成に苦心していただきたい。子弟の内、一人が会長になればみんなが支える人材になってほしい。嫁や養子に出す時もあるだろう。嫁ぎ先の教会の上に役立つように仕込んでほしい。

来年8月の後継者講習会は、20才から40才までの全ての方——ベテランの教会長も布教所長夫妻も、初代の方も全て——が対象。本部で2泊3日の講習会を準備するので、大教会で、教会を掛け送り込んでほしい。

教会長講習会・後継者育成講習会は、教祖140年祭に向かってスタートしたこれからの道の上に、旬に大きく活躍してくれる人材の育成のために打ち出されたものと思う。

▼声を掛けることの大切さ

子供達を信仰的に育てる責任者は親、また、親が一人ひとりの顔を見て育てるのだが、親の目の届かないところ・足りないところを補うのが本部や教会・地域の育成だ。

こどもおぢばがえり・春の学生会・学

生生徒修養会・女子青年大会など、様々な行事が実施されている。教会や地域でも様々な活動が行われている。10月には青年会総会がある。更には書籍類がある。

天理教くらい、育成活動が充実した教団はない。しかし、いくら活動や行事があっても子弟に声を掛けねば何も始まらない。漏れることなく声を掛けて参加して欲しい。

とにかく、お道は声をかけねばならない。にをいがけもおたすけも、伝えたい・たすけたいと思っただけではにをいも掛からないし、声をかけねば何も始まらない。——出発点は声を掛けること。

気を付けること——「この子はいくら言ってもダメ」と思っていた子に、あるとき、ふと、「学生会に参加、どう？」と声を掛けた。すると、意外にも参加し、それをきっかけに、段々成長してとうとうある教会の会長になった。

この教会長子弟育成プロジェクト・後継者講習会に、積極的に声を掛けて、徹底した活用をお願いしたい。

しかし、実際にすぐ結果はでない。性急に結果を求めず、じつくりと腰を

据えて取り組む。140年祭に結果が出てくるくらいの気持ちを持てば良い。先々の楽しみにしよう。

▼「感謝、慎み、たすけあい」

三年千日は実働・実働で進めたが、実働は継続しつつ、改めて信仰の基本に立ち返り、親神様・教祖にご守護と御恩を感じるのが信仰だ。

危ないところを助けられれば「命の恩人」という。恩を仇で返す人は、世間では「恩知らず」という。世間でも「恩」とは、知られている言葉だ。

「感謝、慎み、たすけあい」この三つは陽気ぐらしのキーワードとして提言している。現代社会の足りないところ、出来ていないところを訴えている。

「感謝の心」——現代ではお世話をしてもらってもそれが当たり前に思っ
てしまつて「ありがとう」の声が出ない。心を使つても親なら当たり前、世話を受けても行政なら当たり前と思
う。そこには感謝の心は生まれない。
「慎み」——これは「もつたいない」、
世界の共通語にしようとの動きもある。

「たすけあい」——親は親、子は子ではない。互いに助け合うのだ。

「感謝、慎み、たすけあい」——この三つを陽気ぐらしのキーワードとして提言している。

▼御恩報じの道

8月にはリオデジャネイロでオリンピックが開催され、日本のメダリストから、感謝の言葉が、随分、聞かれた。ほとんどのメダリストが、周囲の支え・親・これまでの支えに感謝の言葉。

しかし、その後、支えてくれた親や周囲の方に、以前と態度が変わらねば、口で「感謝」というだけでは、本当の意味の感謝にはならない。本当に感謝の心があるなら、親孝行させてもらおう、周囲の人のため、この人のため、何かさせてもらおう、これが本当の感謝と言えるだろう。

お道の信仰もこれと同じ。芦津の初代は、大阪の西区で生まれ。明治12年、娘の身上をたすけていた、だいて入信。当時は、大阪の開港に合わせ、外国人の居留地が西区に出来、とにかく大勢の人で賑わう大阪の中心地だった。

一方、明治12年当時の大和の農村の中山家の周りは、いくつか家も点在していたが、ほとんど田んぼ、平屋、殆どの人が農業だった。

井筒梅治郎が、おぢばに帰つておや
いきの人の食事の貧しさに驚いた。教
祖の食事の質素さ。梅治郎はそれを見
て「これは申し訳ない」と思った。梅
治郎は教祖の御恩を思い、何度も商売
の傍ら珍しい物をおやしきへ運ぶこと
が常の行いになった。

徒歩か人力車。むしろ費用や骨を折
ることが嬉しくてたまらなかつた。可
愛い娘を助けてくださった教祖にお喜
びいた、だくことが喜びの「心となつた。
ご守護に対して、心底「有り難い」
という御恩報じの心が生まれてくる。

これが信仰の基本だ。
教祖は50年のひながたを通られた。
慶応3年、江戸時代の終わり頃、その
頃の36日間のおやしき参拝の台帳が奇
跡的に残っている(後はなくなつたの
か、警察に没収されたのかも分からな
い)。その台帳には、どこから来たか・
年齢・おたすけの内容を秀司先生が記
録された。足が痛い、目が見えないな
ど、36日間の記録が残っている。

この36日間に約2千人、その内、教
祖におたすけを願ひ出たのが約千人、
残りは、信者の御礼参拝、身上者の付
き添いなどだ。

1年に直すと1万2千人を助けられ

たことになる。ひながたの50年を考え
ると、教祖は、直接、数万人の人をた
すけておられる。

皆、助けられて有り難いと思い、最
初は、お供えや農作物をおやしきへ届
けたことだろう。人はおたすけを受け
て感激する。しかし、「神の自由して
みせても一日たつ、十日たつ、三十日
たてば、ころつと忘れてしまう。」——
そういう信仰が大半だった。一代限り
で、二代に繋がっていない。道から離
れていった。

たすけられた数万人の中で、今、信
仰についているのは、一握りの数十軒
だけだ。しかし、一握りの人、生涯掛
けて御恩報じの心が定まつた人が、今
のお道の礎を築かれた。

御恩報じの心は、信仰に行き着く。
それぞれ、皆様の教会も同じ。初代の
御恩報じ、たすけ一条の心定め、教会
の元一日も御恩報じだ。これが、昔も
今も変わらない、私達の信仰の基本〓
御恩報じ。

自分がたすかつたことを人に話し
て、おたすけに行く、いをいがけに行
く、ひのきしんに行くのも御恩報じ
——せずにはいられない。

先人に続く私達、一にも二にも教祖

に喜んでいただくことを、よふぼくとしてお励みいただきたい。日々の暮らしの中で、信仰の基本に立ち返ってほしい。

▼ご守護を実感する

信仰を通る中に、何故私が、何故こんな時に身上が、と身上・事情に遭遇する時がある。この節の中にもその中に親心がある。それを悟ると、一層心が治まる。

身上・事情の中に「大難は小難」にしてくださいに気付かせていただく。節の中に込められた親神様・教祖のお心に気付くのに、教会の存在、教友の存在がある。

私が神様のご守護を実感したこと、それは21才と25才の時。

東京の大学生の時、直属の学生会を創ろうと思って活動を初め、東京教務支庁を会場に発会式にこぎ着けた日、発会式が終わった後、居酒屋でお祝いした。その時、争いが起こり、仲裁に入った私は大けがをした。

その日は父、会長が手術をする日。父の手術と重なる日の大怪我、こんな時に何で私が怪我をするのかと、21才の私は、神様の思召しが分からなかつ

た。そんな時、千葉にある芦津部内の教会長に「こんな時には親に知らせてお詫びせねば」と教えられた。母親に連絡すると、「会長の手術が難しいところ、あなたの怪我が身代わりになってくれて、手術できるようになった」という。私は尊敬する父を助けてくださった親神様・教祖に心から御礼を申し上げた。

また、私が25才の時、会長になった。三代真柱様は、私に「布教したことがないだろう。現職の会長のままで布教しなさい」と本部青年が入る布教の家に入った。教祖百年祭の丸一年前、勇んで通る中に二ヶ月目、仲間が風呂のガスを消し忘れた。風呂当番だった私は、ガスを消しに行き、石鹸で滑って煮えたぎる熱湯の中に左腕を突っ込み大やけどしてしまった。左腕の肘から手首の先まで全部皮膚が剥がれてしまった。

病院に行くと腕をたたんで寝たので腕が伸びないようになる、ケロイドになる、剥がれた皮膚はお尻の皮を張って移植すると言う。「医者はケアするだけ、皮は作れない自然の力だ」と言う。神様のことを言っていると思った。治療に三ヶ月、長引いたら六ヶ月という。

私は勇めなかった。一つは自分の不注意で申し訳ないと思った。腕が伸びなくなったら「かしもの・かりもの」の身体に申し訳ない。また、真柱様から教祖百年祭までの一年間、しっかりとをいかけと言われたのに二ヶ月目に大けがをしてしまった。――節の中に親心がある、ご守護がある。よく分かっているが喜べない。

その時、名東の柏原先生に「節の中に喜べない、勇めない」と尋ねると先生は「大教会長になったんやから、たすけ一条に進むんだ。おつとめが出来、おさづけが出来たらそれ以上求める心は欲だ」と言っておさづけしてください。

私の左腕は、おさづけをするときも支障はない、十二下りのおつとめの所作をしても十分に出来る。不自由はあるがおつとめするのもおさづけを取り次ぐのも何も支障がない。熱湯に頭から突っ込んでいたかも知れない。そう思った時に、「現職の大教会長だから真っ直ぐにいけ、寄り道している暇はない、おつとめとおさづけで行け」と、教祖が抱き止めて片腕で止めてくださったと悟れた。

「親が先に子供を見送る」中を、三

代、通ってくれた。それを思うと、「信仰してなかったらあの時死んでいた。」教祖に御礼申し上げ、泣けて仕方がなかった。「大難の中、親神様・教祖有り難うございました。」――と、あの節の中で大恩を感じた。

32年、私が会長として勤めている元一日が、この21才と25才の出来事。信仰は有り難い、教祖有り難い、旬々に親神様が救ってくれた、若い頃、母や先輩が諭してくれた、自分一人では悟れなかった、節が有り難いと悟れた。

困難の時のお諭し・助言は生涯、忘れることはない。お諭しで救われていく。怪我の時、一人で悩み落ちこむ、こんな辛い事はない。そういう時のために教会が、教友がある。日々、諭し合いの道、たすけあい、よふぼく仲間は支えあうこと、そうした中から親神様・教祖の御恩を悟ること、先ずは理の親が真心込めてお諭しすることだ。

▼陽気ぐらいの道場へ

所属する教会を陽気ぐらいの道場にふさわしい雰囲気にしてほしい。そう、努力してほしい。教会の雰囲気を作るのは人、親神様・教祖が作るのではな

い。世間話・人の悪口を聞かされると
ころではなく、教えの有り難さ・親孝
行・陽気ぐらしの話しを聞かせてもら
う、親心を聞かせてもらう、教会がそ
ういう雰囲気になるよう、親神様のご
守護・教祖のひながたの有り難さ、日
頃から意識して教会の雰囲気を作つて
ほしい。

教勢の有る教会は、実際に、「守護・
御恩」という言葉が飛び交っている。有
用な人材は教会で育つ。これから御恩
報じに勇んで勤める人材が育つ教会を
目指す。親心を御恩と感じ、常に心掛
けて周囲の方々に勇んで御恩報じの思
いを積み重ねていただきたい。教祖140
年祭へのスタートを切った今、御恩報
じの思いを信仰の基本として、一にも
二にも教祖にお喜びいただく道の御用
を通ろう。

あくまでも目標は陽気ぐらし。共に
向かう次の一里塚、十年先を見つめて、
教祖140年祭を目指して、どうでも教祖
にお喜びいただき、次の成人に向かっ
て地に足をつけて、教祖にお受け取り
いただく成人の道を、一手一つに、心
一つに勇んで進もう。皆様方のご丹精
を弛みなきよう、切にお願い申します。

《以上要約》

**8月・9月と「有志
ひのきしん隊」実施
青年会**

毎月恒例の青年会笠岡分会有志ひの
きしん隊。8月は、18日に笠晴分教会
に出動し、4人で敷地内の草刈り・整
備などを行つ

た。翌9月は
13日に弥高山
分教会に出
動。5人で家
具などの物品
搬出・整理を
行つた。
青年会で
は、ひのきし
ん参加者と、
ひのきしん先
を随時募集し
ている。ひの
きしん参加は
各ブロック委
員に、ひのき
しんの依頼
は、大教会上
原一始まで。



8月18日、笠晴分教会にて草刈り・整備

**障子張り替え
ひのきしん 実施
10月3日・4日
管理部**

管理部(武内清明部長)では、10月3
日・4日の両日、客殿棟・教職舎などの



9月13日、弥高山分教会にて物品搬出・整理



10月3日・4日、大教会にて障子張り

障子張り替えひのきしんを行い、管理
部・婦人会・青年会など67人が参加し
た。
男性が障子を取り外し、婦人会は障
子を洗ってはがし、乾いた物から貼り
付けを行った。3日は午前8時から午
後5時まで、4日は午後から出来あ
がった障子を取り付けて終了した。

島根分教会で創立120周年記念祭執行さる

遙かに伯耆大山を望み、中海の潮風を受けて「ベタ踏み坂」を越えた辺り、昔の港町、一際小高い神殿が目につく所、天理教島根分教会は位置します。

教会創立120周年記念祭を、立教179年9月18日に、大教会長ご夫妻をお迎えして、門脇



親神様・教祖・霊様に御礼

元教会長祭主で執行された。当日は朝からの雨で足元の悪い中ではありましたが、三百余名が参拝し、共々に祝う心の「みかぐらうた」を唱和し、大教会長様のご挨拶には、緊張と期待に目を輝かせて聞き入りました。

今回の記念祭には「若い力の結集」を、会長始め役員で申し合わせて、十年先を鑑みて、その人達を含めた実働ある準備が進められてきたのです。

笠岡大教会長様はご挨拶で、年代ごとにわかりやすく、笠岡の道から続く、島根の道へとお話を進められました。先人の苦勞を、その苦勞を喜びに変えての道中を忍び、御教えを一筋の灯りに、お通り下された勇氣ある先人を讃えられたのであります。

更には、次の塚に向かい「人様に助かって頂きたい」そのおたすけの精神を培い、その心に「親神様・教祖」が御働き下さるのだから、一層の「おたすけ」に励み、この島根の道が、伸び栄えゆく為にも「おたすけ」を、いつまでも、どこまでも、続けることにある。と、熱く、強く、心のこもる、ご祝辞を頂戴しました。



熱く祝辞を述べられる大教会長様

一旦、記念撮影など、会場準備も整えて記念祭アトラクションが始まりました。

島根部内の皆さんによる、それも若人の勢いある、お祝いムード満点の「祝い事」から始まりました。

大教会長様・奥様にもご臨席いただき、共にお楽しみ頂きました。

若い者には負けじと、先輩達も次々と披露する「かくし芸」や、カラオケ大会も続いて上演されて、会場は盛り上がり、ひと昔はさぞかし・・・の男女が競い合うように、自慢の喉で、声を張り上げて、気持ち良さそうに歌っていました。

会長による「くじ引き」も楽しく、ワクワクしながら「景品」を受け取るたびに、拍手と歓声が会場に響いて・・・最高潮に！

名残惜しい終盤の挨拶に続いて「万歳三唱」で締めくくられました。

(島根分記念祭記録掛・西村)



佐藤詰所主任を先頭に「神名流し」を実施

教養掛の声



詰所でも勇んで

「にをいがけ！」

教養掛 西村彦一

9月28日、曇天の笠岡詰所を9時30分に出発して、北西の住宅団地で、佐藤詰所主任を先頭に13人が「神名流し」をしながら、個別にパンフレットを配布して歩いた。

905期の修養科の詰所生は2から3人のグループで回りました。その中には、

5歳・1歳の2人の子供も一緒に、先
楽しみな「にをいがけ」で、きつと教
祖も「おててたたいておよろこび」
下されたものと感じいました。905期
の修養科もまだ2ヶ月目になったばかり
ですが、明るく陽気な地歌の声は、
団地の皆様の心に届いたものと思われ
ます。これからの2カ月を陽気で健康
に過ごして「にをいがけ」を務める事
ができました。

佐藤詰所主任は帰ってから、参加者
に、おねぎらいの言葉を掛けてくださ
いました。

教会おとまり会の報告

▼福満隊

実施日 28年7月23日～24日
参加者数 少年会員15 育成会員16
合計31

内容 紙粘土工作・花火など
感想 子供達が大変喜んでくれ
ました。

▼引野隊

実施日 28年8月6日
参加者数 少年会員5 育成会員6
合計11

内容 おつとめ、プレゼントと
して図書券を渡す。

感想 今回は中々、育成会員と
少年会員の休みが合わないの、月
次祭の日に少しの時間でも行いまし
た。夏休みには育成会員と少年会員
が顔だけでもあわせることも大事な
ので、夏休みにはみんなで会おうと
常に思っています。

▼廣町隊・福廣隊合同

実施日 28年8月8日～9日
参加者数 少年会員5 育成会員5
合計10

内容 鳴物練習、宿題、ソーメ
ン流し、花火、近所のごみ拾い、プ
ールなど。

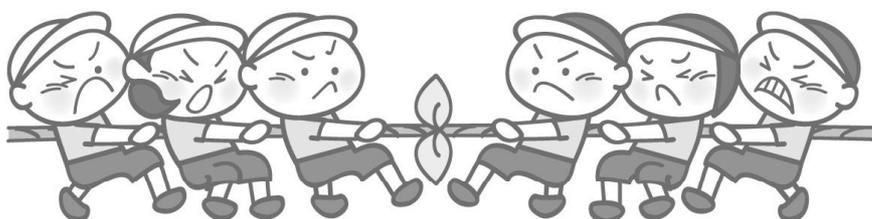
感想 こどもおちばがえりの熱
がさめないうちに開催させて頂く。
参加人数が少なかったけれど、お泊
まり会は楽しいと。鳴物練習が楽し
いと。友達と一緒にごみ拾いも楽し
い。

▼福富士隊

実施日 28年8月12日～13日
参加者数 少年会員17 育成会員4
合計21

内容 朝夕のおつとめ、ひのき
しん、ゴミ拾いなど。

感想 こどもおちばがえりに参
加して下さった子供たち中心に声を
かけました。8帖、6帖の2部屋に
17人が泊まった事に心より嬉しく思
いました。



秋季霊祭祭文

これの笠岡大教会の祖霊殿にお鎮まり下さいます本席様の神霊 初代真柱様並びに奥様の神霊 二代真柱様の神霊 大教会創設の祖上原佐吉大人八重刀自の神霊 初代会長上原さと刀自の神霊 二代会長上原伊助大人光刀自の神霊 三代会長上原繁雄大人くに多刀自の神霊 四代会長上原郁雄大人朝子刀自せい子刀自の神霊 歴代会長と共に道の上に御苦労下さいました役員 部内教会長 教人 よふぼく 信者の神霊 諸々の神霊の前に會長 上原理一慎んで申し上げます

祖霊様方には 親神様教祖に御心を見定められ旬を得てこの道にお引き寄せ頂かれまして 以来その事に感銘を受けただけではなく どんな艱難苦勞の中も厭わず喜び心一杯に御恩報じを念じてたすけ一条に邁進されました そうしたたすけ一条の道は次々と伸び広がり今日の道の結構な姿をご守護頂いております 此もひとえに親神様教祖のお導きの賜である事は申すまでもありませんが 又一つにはそうした祖霊様方の真実の伏せ込みの賜と朝夕に御礼申し上げております その中今日の吉日は秋の霊祭を執り行う日柄でございますので 只今は親神様の御前でてをどりをとめさせていただきます 引き続き御前に馳せ参じてまいりました 旬の種々の物を供え在りし日の面影を偲び御遺徳を称える皆の真実の状を御覽下さいまして祖霊様方にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて教祖百三十年祭も終わり 年祭の年として少しでも教祖にお喜び頂けるようたすけ一条の上に邁進させて頂いております その中本部では次の塚を目指しての歩みが始まっております 特に若い世代の道の後継者育成に力を注いでいます 笠岡としてもその流れを活かすべく 今道に繋がっている人のより一層の成人を計ると共に 新しい人をおおぼに連れ帰り育て上げるべく 十一月二十三日の笠岡おちば帰りを目指してにをいがけおたすけにつとめ励ませて頂いております

祖霊様方の御恩報じの歩みと比べるとお目だるく感じる所もあるかと思ひますが 与わった徳分を精一杯活かし 力の限りに努める皆の真実の状を御覽下さいまして たすけ一条の歩みの上に親神様教祖のより一層自由のご守護を賜り 道の伸び広がりをご守護頂けるようお力添えの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

青年会創立100周年記念決起

天理教青年会笠岡分会総会

日 時：平成28年12月4日(日)

午前8時半受付開始

会 場：笠岡大教会

内 容：おつとめまなび（ブロック毎）、式典、
抽選会

※総会前日20時に詰所から大教会までの帰笠便が出ます。

事前に詰所（上原喜三）までお申し込み下さい

笠岡につながる青年会員は、必ず参加しましょう!

立教百七十九年 九月月次祭 祭典役割表

胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	おつとめ				てをどり			地方	役割 区分	講話	祭主		扨者		
									大教会奥様	岡本久善	上原明勇	岡本久善	大教会奥様	田中ますみ	内海安子				武内正美	吉岡誠一郎	中島誠治	上原繁道	上原繁次
今川佐智子	上原順子	虫明好美	岡崎真一	森本忠平	三島涉	佐藤道孝	谷内伸自	今川昌彦	門脇郁子	田中ますみ	大教会奥様	岡本久善	上原明勇	岡本久善	大教会長様	森本忠善	笹尾正治	吉岡壽	坐り勤	十一月講話 海外伝道講習会	大教会長様	上原志郎	今川昌彦
谷内美知子	岡崎豊子	佐藤香苗	武内清明	上原浩	山野弘実	横山逸郎	山田敏教	高木昭祥	森本富美子	内海安子	武内正美	吉岡誠一郎	中島誠治	上原繁道	上原繁次	岡崎真一	中村剛	前半	指図方		横山逸郎	渡邊隆夫	上原繁道
室悦子	中村初美	笹尾一美	浅野明生	虫明立	佐藤真孝	田林久嗣	赤木素志	内海史郎	横山小智榮	高木孝子	門脇加津	中村道徳	上原志郎	中村邦義	渡邊隆夫	杉原博之	門脇元教	後半	賛者		高木昭祥	佐藤真孝	佐藤道孝

立教百七十九年 秋季霊祭 祭典役割表

胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	おつとめ				てをどり			地方	役割 区分	講話	祭主		扨者		
									大教会奥様	佐藤道孝	上原明勇	上原明勇	大教会奥様	田中ますみ	岡崎順子				上原真一	岡崎真一	中村邦義	吉岡誠一郎	渡邊隆夫
三島照美	門脇加津	佐藤香苗	上原志郎	内海史郎	浅野明教	今川昌彦	赤木素志	岡崎真一	上原真一	岡崎順子	大教会奥様	佐藤道孝	上原明勇	上原明勇	大教会長様	渡邊隆夫	吉岡誠一郎	中村剛	前半	指図方	高木昭祥	佐藤真孝	佐藤道孝
横山小智榮	吉岡八恵	内海安子	森本忠善	上原繁次	横山逸郎	田林久嗣	武内清明	上原浩	岡崎和	岡崎豊子	武内正美	山野弘実	三島涉	門脇元教	内海史郎	中島誠治	中村剛	後半	賛者		高木昭祥	佐藤真孝	佐藤道孝

大教会だより

◎教人資格講習会(中期)修了者

立教179年10月6日終講
高屋 秀平 元一

◎本部食堂ひのきしん

自 立教179年10月1日
至 立教179年10月15日
府 鮮 奥 忠 郎

◎立教179年秋季大祭参拝

海松ヶ岡	呉照	芳井	陶山	ひろさと	興明	金浦	摩耶	陽備	弥高	鶴山	久松	島根	神邊	高屋	福山
中村	吉岡	大教会奥様	佐藤道孝	門脇元教	大教会奥様	大教会奥様	田中隆之(11月)	佐藤道孝	大教会奥様	上原繁道(11月)	大教会奥様	上原繁道	中村剛	吉岡壽	門脇元教

東悠	吸江	照陽	輝美濃	新山邑	皆部	明石市	上中市	府中市	東城市	服部	島中	驛家	油木	葦陽	湯田	備中	神昭	美郷	錦備	笠晴
中村剛	吉岡壽	中村邦	佐藤道孝	佐藤道孝	上原繁道	田中隆之	大教会長様	大教会長様	吉岡壽(11月)	吉岡壽	上原繁道	門脇元教	大教会奥様	中村邦	上原繁道	佐藤道孝	中村邦	中村邦	田中隆之	門脇元教

訃報

佐藤主計氏

御野分教会前会長

8月31日出直されました。
享年 83才



まず、最初に、関係方々様、ありがとうございました。このたび、無くならないと思っていました弟の肺に、又、リンパにあった癌が、元どおりの体になりました。

今から2年前の事となりますが、時は立教179年10月22日、教会の近くの信者さんが来られ、弟さんをこの前、岡山大学病院で見たでといわれ「どこか悪いんかなあ」と言われて帰られました。

どこか悪いとも、一つや二つはあるわいなあと思いつつ、夕方、薄暗くなるにつれ気になってしかたなくなりました。

まあ、電話して見るかと思いい電話を試してみた。「どこが悪いなあ」と聞くと、びつくりしたような声で、少し間をあけて「もういけんのんじや、黙ってこころと思つとたんじやけど、今日、先生に肺癌です」といわれたそうです。

後日、この日のことを聞くと、まあ今は、肺癌は手術すれば直ると思ったのですが、そのあと先生が「この癌は手術することができません」といわ

れ、またリンパにもあったようで「ステージ4」と言われ、手の震えがくると同時に、その椅子の上で気を失っていったそうです。

なんで、なんで、弟が先なんよと、気の重い中、いろいろと思案させていただき、ともかく、お願いづとめをさせていこう、姉妹にお願いしよう、信者さんをお願いしようということでした。

3日目、25日の朝に終わり、すくさま、本部大祭へ行かせて頂き、26日は願う願うの一日でした。

教祖130年祭を無事迎えるころには、リンパにあったガンはずでになく、肺のあちらこちらにあったガンも小さくなっていたそうです。

あの日より2年目の立教179年10月26日を無事迎えさせていただくころとなった今、癌は見えなくなったそうです。このことを返りみますと、出会う人、話を聞かせて頂く人が、あまりにも決められていた事のように思います。世の事、ある事、起こる事、いついにおいて、偶然は無いと、あらためて感じさせていただきました。多くの方々に、報告とお礼申しあげます。
今、助かる句。

(と)

昭和54年 (1979年)	立教142年	昭和53年(1978年) 立教141年
2・26 引野分教会移転建築 奉告祭：三月十一日 鎮座祭：三月十日 陽備分教会教祖お社取替 2・22 第三回男鳴物(笛)研修会(二六人参加) 2・4 第二回男鳴物(笛)研修会開催(三六人参加) 1・21 大教会史編纂常任委員会(この年以後九回開く) 1・20 ふしん常任委員会(この年以後九回開く) 1・16 中山善司様 真柱継承者に推戴	12 機関誌「かさおか」第十八巻第十二号から部内教会史の連載開始 この年、第八十三母屋笠岡詰所の建築がはじまった。その模様はかさおか 第十八巻第六号から逐次掲載されている。また「ふしん日誌」として全工程が同じく第十八巻第九号から掲載が始まった。ご本部では三月二十八日 東西礼拝場ふしん事始お願いごとめが行われ、教祖百年祭へ向けての事業の一環がスタートした。 この年の大教会年間統計 初席者五百五十三人 おぎづけの理拝戴者二百四十三人 修養科修了者百二十一人 教人登録五十九人 教人総数二千七百四十二人 よふぼく総数六千九百三人。全教よふぼく総数七十八万二千九百九十二人。	

昭和53年 (1978年)	立教141年
12・7 第二回男鳴物(笛)研修会(二八人参加) 11・22 氷上分教会前会長・十倉一雄先生を迎え婦人会笠岡支部主催婦人よふぼく大会挙行(五〇〇人参加) 10・30 本部長・谷岡元太郎先生を迎え教長講習会(一六〇人参加 三日まで) 10・26 西礼拝場堀方始めの土持ひのきしんに大教会から八百人参加 おつとめ奉仕人 山野喜美恵 准承事 岡崎孝志 中村剛 田林志計実 三島克巳 岡崎和夫 承事 今川昌夫 上原眞雄 岡本久善 幹部承事 今川昌夫 藤井壽男 高田通昭 大教会役員任命 10・21 品治分教会附属建物増築 9・26 新たに六十七柱の神霊を大教会祖霊殿に合祀 9・21 月一六日に移転完了)	9・4 笠岡市の小丸墓地から大教会境内地に造成した新墓地への移転始まる(三六〇〇平方メートル 九 第二回「かん様」に続く会(三八人参加) 8・22 少年会笠岡団ソフトボール大会挙行(二八〇人参加) 8・6 第二十一回夏季英語講習会開催(六〇人 九日まで) 8・2 こともおおぼがえり第五回団出発(福山 九二八人 五日まで) 7・30 こともおおぼがえり第四回団出発(島根 三二五人 八月一日まで) 7・29 こともおおぼがえり第三回団出発(神邊 八九三人 八月一日まで)